

国語

(配点)

1	33点
2	38点
3	29点

(注意事項)

- 1 問題冊子は指示があるまで開かないこと。
- 2 問題冊子は一ページから十九ページまでである。検査開始の合図のあとで確かめること。
- 3 検査中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、静かに手を高く挙げて監督者に知らせること。
- 4 解答用紙に氏名と受験番号を記入し、受験番号と一致したマーク部分を塗りつぶすこと。
- 5 解答には、必ず**HBの黒鉛筆**を使用すること。なお、解答用紙に必要事項が正しく記入されていない場合、または解答用紙に記載してある「マーク部分塗りつぶしの見本」のとおりマーク部分が塗りつぶされていない場合は、解答が無効になることがある。
- 6 一つの解答欄に対して複数のマーク部分を塗りつぶしている場合、または指定された解答欄以外のマーク部分を塗りつぶしている場合は、有効な解答にはならない。
- 7 解答を訂正するときは、きれいに消して、消しくずを残さないこと。

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

俳句は和歌に比べて、現実(1)に重みを置く。現実とは、生きていくこと。働き、食べて、次代へ命をつなぐ営みだ。

ところが、俳句そのものは、現実(1)に寄与しない。一片のパンによっても腹はふくれるが、一つの句では何も救えない。

この矛盾の中に生きるのが俳人だ。俳人といえは、飄々(注1) びょうびょうとして霞を食らいながら茅屋(注1) ぼうおくで句をしたためているイメージがあるが、その茅屋に至るまでにはさまざまな現実との確執がある。そして、茅屋に座してもなお、心中の確執は続いている。

つらつら年月の移り来し拙(つたな)き身の科(とが)を思ふに、ある時は仕官懸命の地をうらやみ、一たびは仏籬祖室(ぶつりそしつ)の扉(とほそ)に入らむとせしも、たどりなき風雲に身をせめ、花鳥に情を勞して、しばらく生涯のはかりごととさへなれば、つひに無能無才にしてこの一筋につながる。

〔「幻住庵記」〕

(つくづく、今までの愚かな自分の過ちを振り返ってみると、ある時は主君に仕え領地を得る身分をうらやましく思い、また一度は仏門に入り僧侶になるうかともしてみたけれど、行き先を定めぬ旅の風雲に我が身を苦しめ、花鳥風月を愛(め)でることに心を費やして、ひとまずそれが自分の生活するための仕事にまでなつたので、無能無才の身でただこの俳諧という一筋の道につながれることとなつた。)

芭蕉が大津の小庵「幻住庵」でしたためた一文である。若き頃には、武家に仕官して働こうとしたり、仏道修行をしようと思つたこともあつた。それもかなわな(2)いで、「夏(か)炉(ろ)冬(とう)扇(せん)」(「許六離別の詞(ことば)」)のごとき俳諧(1)に一生をかけることになつたというのだ。

俳人とは高みの見物をきめこむ者、あるいは、みずからは安全(1)ケン(a)において世の中を斜めに見る者の総称というわけではないことが、この言葉からわかるだろう。

「幻住庵記」の末尾に、次の一句が掲げられている。

まづ頼む(い)椎(い)の木(き)もあり夏木立(なつこだち) 芭蕉

頼むべきものといえは、人。そして、金。そのどちらも自分は持つことができなかつた。そのかわりとして、夏木立の中の、ふとぶとした椎の木がある。

たとえば、別荘を買って、近くの木が気に入り、朝夕の眺めを楽しみ、ハンモックを吊(つ)つてみる……。そうした感覚ではないのだ。頼むものとして、樹木をまず挙げることになるという境遇は、現代人には理解しがたいものになっている。

では、そうした身の上に対する自虐なのかといえは、そう単純ではない。たとえばこの句の「夏木立」がもつと頼(い)り(い)ないもの——草花であつたり、冬の枯れ木であつたりすれば、これは「無能無才」を羞(は)じている句であるというだけだ。あああおと葉を茂らせ、どくどくと大地から養分を吸い上げている、夏の椎の木を知(し)己(こ)として(注3)いるという(注4)ことは、俗塵(ぞくじん)を遠(と)ざけたみずからの境遇を驕(おご)る気配(き)さえある。

「椎の木」には、^(注5)屹立する十七音の文芸が託されているとみるのは、深読みにすぎるだろうか。

『おくのほそ道』(元禄十五年「二七〇二」刊)の冒頭部が、^(注6)李白の「夫れ天地は万物の逆旅にして、光陰は百代の過客なり。而して浮生は夢のごとし、歡を為すこと幾何ぞ」(「春夜宴桃李園序」)を意識していることは、あきらかである。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

これに先んじて、ある作家が、李白の詩を踏まえた文章を書いている。その名は、^(注7)井原西鶴。

されば天地は万物の逆旅。光陰は百代の過客、浮世は夢幻といふ。時の間の煙、死すれば何ぞ、金銀、瓦石には劣れり。黄泉の用には立ち難し。然りといへども、残して子孫の為とはなりぬ。
〔日本永代蔵〕貞享五年「二六八八」刊

芭蕉と西鶴。ともに李白をパロディしながらも、二人の人生観の相違がよく表れている。⁽⁴⁾

芭蕉は、天地も時間もすべて刻々と変化していく旅人であるというのならば、自分もその中の一部として従おうとする。船頭や馬方に目をやるのは、俳諧の現実主義的な一面を表すとしても、芭蕉の心の中にあるのはあくまで「古人」であり、今昔や貴賤を超越して現世を眺めていることがわかる。

西鶴は、すべてが刻々変化するこの世は夢のようであり、いくら金をためても死んでしまえば何の役にも立たないといいながら、子孫のためになるという理由で、それを肯定する。「金銀を溜むべし。是、二親の外に命の親なり」(『日本永代蔵』)という言葉を吐く西鶴は、したたかな現実主義者だ。⁽⁵⁾
そもそも、芭蕉の旅そのものが、当時としては異質であった。

交通網の発達した江戸時代には庶民も旅をしやすくなり、多くの人々が五街道を行き来した。なんといつても伊勢への関心は高かったが、それは「伊勢参宮大神宮へもちよつと寄り」という川柳に詠まれているとおり、^(注8)目的は物見遊山であり、日々の憂さを晴らして明日への活力を得るためのものだ。

しかし、芭蕉の旅は違った。もちろん、蕉風を伝え、俳諧師としての名声を得、生計の安定を図るためという現実的側面があったことは確かだ。だが、そこには古人の足跡に触れたい、^(注9)歌枕の現状を知りたい、みずからの思索を深めたいという、^(注10)形而上的な理由が大きいのであり、一般の人からみれば「無駄骨」としかいいようのない旅であった。

芭蕉は忍者であったという説が生まれるのも、この旅が、いかに一般の人に理解されづらいものであったかを、証明しているだろう。諜報活動という現実的な目的もなく、なぜあえてへん境の地をめぐる旅に出るのか。説明ができないのだ。⁽²⁾

芭蕉の旅が生んだ『おくのほそ道』という紀行文もまた、板坂耀子いたさかようこによれば「江戸時代の紀行としては異色作である」という（『江戸の紀行文』中公新書、二〇一一年）。それは観コウガイドでもなければ、個人的な日記でもない。世の真理を、時間を超えて後世の人々にも示そうとした。

俳句は、複雑である。キメラ的である。短さゆえに作りやすく、大衆の詩であることも確かだ。(注12)市井しせいに生きる無名の人々の述懐でもある。一方で、(注13)超ゼン超ゼンと高みから見下ろしての垂訓(注13)でもある。「高く心を悟りて俗に帰るべし」(『三冊子』)と語った芭蕉は、この複雑さを受け入れて、苦しみながらも名句を生み出した。複雑さが、俳句という文芸を今に残してきたのだ。(注12)高柳克弘たかやなぎかつひろ『究極の俳句』中央公論新社 による

(注1) 茅屋ちやうみすほらしい家。あばら家。

(注2) 芭蕉ちやう江戸時代の俳人で、『おくのほそ道』『幻住庵記』『三冊子』の作者。「蕉風」は芭蕉とその一門の作風をいう。

(注3) 知己ちき自分のことをよくわかっていてくれる人。(注4)俗塵しやくじん俗世間のわずらわしい事柄。

(注5) 屹立いりつ高くそびえたっていること。(注6)李白らいはく中国の詩人で、『春夜宴桃李園序』の作者。

(注7) 井原西鶴いげんせいかく江戸時代の浮世草子作者、俳人。『日本永代蔵』の作者。

(注8) 物見遊山ものみゆうざん気晴らしにあちこち見物すること。(注9)歌枕かまくら和歌の題材とされた名所、旧跡。

(注10) 形而上的けいじやうじやう形がなく、感覚でその存在を認識できないこと。精神的。

(注11) キメラ的キメラ的同じもののなかに異なるものが同時に存在すること。(注12)市井しせい人が多く住んでいるところ、まち。

(注13) 垂訓ちいじゆん教えを示すこと。教訓を後世の人に残すこと。

問1 本文中の、安全ケン(1)、ヘン境(2)、観コウ(3)、超ゼン(4) のカタカナ部分の漢字表記として適当なものを、それぞれアからエまでの中から一つ選べ。

①安全ケン ア 間 イ 件 ウ 権 エ 圈 ②ヘン境 ア 片 イ 辺 ウ 変 エ 返

③観コウ ア 行 イ 港 ウ 光 エ 好 ④超ゼン ア 全 イ 然 ウ 漸 エ 禅

問2 本文中の、かなわなAと同じ品詞の「ない」を、本文中のaからdまでの中から一つ選べ。

a わけではない ||| b 頼りない ||| c いいようのない ||| d できない |||

問3 本文中に、飄々として霞を食らいながら茅屋で句をしたためている⁽¹⁾ とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 世間と離れたところに身を置いて、人や金銭にとらわれず質素な生活を送りながら俳句を作り続けている。
- イ 人並みの暮らしはどうか保ちながら、定住することなく旅の中に身を置いて俳句を生み出し続けている。
- ウ 俳諧師として高い評価を得ることだけを心の支えとして、日々世間の人に向けて俳句を発信し続けている。
- エ 人々の好奇の目にさらされないよう郊外に住み、人間の愚かさを皮肉に眺めながら俳句を詠み続けている。

問4 本文中に、「夏炉冬扇」の⁽²⁾ごとき俳諧 とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 火鉢であぶられるような真夏の暑さ、扇であおがれるような真冬の寒さといった極限の環境に着想を得て作られるのが俳諧だということ。
- イ 暑い夏に火鉢を取り出し、寒い冬に扇を持ち出すのが時季外れで意味のないことであるように、俳諧も現実では役に立たないということ。
- ウ 夏に火鉢を使って暖まり冬に扇を用いて涼むといった、常識に縛られない自由な発想によってこそ俳諧は生み出されるものだということ。
- エ 真夏に火鉢で体を熱したり、真冬に扇で体を冷やしたりするように、あえて苦境に身を置いて耐え忍ぶことで俳諧は磨かれるということ。

問5 本文中に、俗塵を遠ざけたみずからの境遇を驕る⁽³⁾ とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 現実生活では役に立たない「無能無才」の自分だが、世俗を離れ自然の中に身を置いたからこそ、地中からたつぷりと養分を吸い上げ葉を茂らせる「椎の木」の生命力に癒されて名句を生み出したのだと自負している。
- イ 世俗の汚れに染まらないために人との関わりを避けねばならず、清貧を保ち続けるために物欲を断たねばならなかった自分の身の上を恨めしく思い、「椎の木」を相手に俳句を詠むことで不満を解消しようとしている。

ウ これまででは世俗を離れるしかなく人や金に縁がないまま俳句の道を極める日々を過ごしてきたが、そのおかげで「椎の木」の名句が生まれ、この句をきっかけに世俗での名声を得られるのではないかと野心に燃えている。

エ 自分が頼りとしたのは、現実に生活を営むうえで助けとなる人や金ではなく、堂々と立つ「椎の木」の存在であったと示すことを通じて、世俗に染まらず俳句に生涯を捧げた自らを誇らしく思う気持ちを述べている。

問6 本文中に、二人の人生観の相違⁽⁴⁾ とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 芭蕉は、刻々と変化する時間や空間に身を任せていくことで、自らも「古人」になりきって創作をしていこうと考えたが、西鶴は、変化する時間と空間に流されないよう生きていくために、変わらない価値を持つお金をためようと考えた。

イ 芭蕉は、多くの時代を経てもなくなることはない船頭や馬方などの現実的な職業のなかに人生の意味を見いだしたが、西鶴は、永遠に価値が変化しないお金を子孫に残していくことだけが人生にとって意味のあることだと考えた。

ウ 芭蕉は、刻々と変化する時間と空間のなかで身分や時代を超えて現実の世の中を眺めるのが重要であると考えたが、西鶴は、移ろいゆくはかない世の中であつても、子孫のためになるのでお金をためることに意義があると考えた。

エ 芭蕉は、変化する世の中にあつても価値の変わらない「古人」を理解することこそが自らの人生にとって最も意味のあるものだと考えたが、西鶴は、世の中を不変と捉え、価値が変化しないお金を子孫に残すことに意味があると考えた。

問7 本文中に、芭蕉の旅そのものが、当時としては異質であつた。⁽⁵⁾ とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 芭蕉の旅は、名声や収入を得る目的もあつたが、それ以上に、かつて和歌に詠まれた場所を訪れ思索を深めるといふものであり、娯楽のための旅を基本とする江戸時代の人々には理解しがたいものであつた。

イ 芭蕉の旅は、現実的な側面が全くなく、自分だけの俳句の世界を作り出すために思索にふけるといふ哲学的なもので、実用的な旅がほとんどであつた江戸時代の人々には受け入れられないものであつた。

ウ 芭蕉の旅は、名声や金銭を得るのが主要な目的であつたが、そのやり方があまりにさりげなく、諜報活動と疑われるほどであつたため、のんびり旅を楽しんだ江戸時代の人々には理解されないものであつた。

エ 芭蕉の旅は、金銭を得るためという側面もあつたが、蕉風を伝え俳諧師としての名声を得ることが主な目的であり、それに向かう真剣さは、旅を娯楽とする江戸時代の人々には受け入れがたいものであつた。

問8 本文中に、芭蕉は、この複雑さを受け入れて、⁽⁶⁾ 苦しみながらも名句を生み出した。とあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 世俗の生活を詠んだ過去の作品を題材としつつ新しい表現を得るといふ俳句の複雑さを受け入れて、芭蕉は試行錯誤しながら優れた俳句を生み出したといふこと。

イ 世俗の言葉で詠みつつ皮肉に満ちた態度を示さなくてはならないという俳句の複雑さを受け入れて、芭蕉は自問自答しながら俳句を詠んだということ。

ウ 世俗を超えた視点を持ちつつ世俗の心を詠むものであるという俳句の複雑さを受け入れて、芭蕉は悪戦苦闘しながら優れた俳句を生み出したということ。

エ 世俗の生活を詠むものでありつつ定住する人間には作れないという俳句の複雑さを受け入れて、芭蕉は東奔西走しながら優れた俳句を生み出したということ。

2 次の文章【I】は、人工知能（AI）の研究者川村秀憲かわむらひでのりと俳人大塚凱おおつかがいの対談で、文章【II】は、文章【I】で触れられている高柳克弘の『究極の俳句』の本文である。この二つの文章を読んで、後の問いに答えよ。

【I】

川村 実際に人間が恋の句をつくる時は、キーワードだけが材料ではありません。恋にまつわることばが入っていなくても、二人の関係性が伝わる句、恋を匂わせる句というのがあります。

大塚 そうですね。例を挙げてみます。

寂しいと言い私を薦つたにせよ 神野紗希こうのさき

踊おどり子の妻が流れて行きにけり 西村麒麟にしむらきりん

神野の句は俳句界ではかなり人口（注1）に膾炙かいしやした句ですが、薦つたという異形になり、離れることのないような関係たることを念じる、あるいは情念に近い祈りのような主体の趣おもむきがあります。

西村の句は、むしろかなり即物的な組み立てです。盆踊りの輪に混じり、遠ざかっていく妻の姿を見送る。湿気を帯びた盆の夜、やがて二人にも訪れる死に別れのイメージを匂わせながら、恋慕れんぼの句としても解釈できます。

川村 その句が、恋の句かそうでないか。現状のAIは、キーワードを含むか含まないかで判断することはできません。一方、人間は、恋のキーワードを含まずに、恋を詠むことができ、読者も、それが恋の句だとわかる。

人間ができることなら、教師データ（注2）をつくれるはずで、それをもとにAIにディープラーニング（深層学習。脳を模したニューラルネットワークを

用いた機械学習)をさせることもできます。けれども、それでAIの作句精度が上がっていくかということ、たぶん上がらない。課題ははっきりしているし、教師データもつくれる。ディープラーニングでも扱える。けれども、やってみると、精度が上がらない。

ここが人間とAIの現時点での大きなちがいです。人間は、俳句なり一文なりを見て、それが比喩的で、抽象度の高い表現によって二人の関係性を伝えていると理解できます。人の心の動き、愛とか恋とかを、経験的に知っているからです。自分の体験もそうだし、例えば、「映画にこの句とよく似たシーンがあった」などの記憶もそうです。それが「背景知識」です。^(注3)

⁽¹⁾夏目漱石が「I love you」を「月がきれいですね」と和訳したという逸話があります。これ、実話ではないともいわれていますが、それはともかくとして、「月がきれいですね」の原文が「I love you」であることを理解するのは、AIにとってきわめて難易度が高い。「月がきれいですね」を告白と受け取るのは、人間にはできてもAIには難しいのです。

AIが、ことばそのものの意味だけではなく、ことばの周辺にある意味、言語学でいうコノテーション(言外の意味)を知識として吸収し、理解するという課題は、まだ手つかずです。これだけ発展の著しい人工知能の研究にも、それを解決するための決定打はまだありません。

大塚 恋や愛が物理的なものではない以上、その俳句に恋情が含まれるのか含まれないのかという判断基準は、時代によって変わったりもします。コモンセンス(常識・良識)もそうです。「背景知識」は、人間の行動様式によっても変動します。行動様式は時代とともに変わっていくので、当然のことながら、恋の捉え方も時代によってちがってきます。

高柳克弘の『究極の俳句』(中公選書、二〇二一年)に、

しら梅や誰^{たが}むかしより垣の外^(注4) 与謝蕪村^{よさぶそん}

という句の解釈をめぐる話が出てきます。

この句、意味としては、「白梅が咲いている。この木はいつだれがその垣の外に植えたのだろう」ということ。もうすこしいえば、そこに住んでいた人、過去にそこに生活していた人の痕跡を見つけて、先人や過去に思いを寄せるといことなんですが、後世になつて、^(注5)萩原朔太郎がその句を讀んで、「恋の句」と解釈しているんです。

萩原朔太郎は、〈しら梅や〉で切れると解釈しました。白梅が咲いている。ここで文脈が切れる。〈誰むかしより垣の外〉の部分は、私(作者)が昔、つまり少年期・青年期に、だれかがその垣根越しにいたことを思い出し、今もその人の気配がずっと残っているような気がする、というわけです。〈垣の外〉には、白梅ではなく人がいると読んだ。これだと、恋慕の句、恋情の句、恋を叙情的に詠んだ句ということになります。

蕪村の時代、江戸時代中期を考えれば、あきらかに誤読ですが、朔太郎が生きた近代では、そういう読みもありえないわけではない。一種、魅力的

な解釈ではありません。

同じ作品でも、読み手によって解釈の幅があつて、そこには時代が反映する。その時代その時代のコモンセンスは変わっていくものであるからには、作品の解釈が大きく変わっていくこともある。そのあたりは、文芸、より広くいえば、ことばに特有の問題だろうと思います。

川村 情報のエンコード（符号化）とデコード（復元）という問題に関わってきましたね。⁽²⁾

コンピューターで情報を伝えるとき、ミスが起こってはいけません。エンコードされた情報は、元の情報に正しくデコードされます。①、M

P3というファイル形式にエンコードされた音楽が、デコードされて私たちの耳に届く。元の音源とちがうものになっては意味がありません。

音源データのMP3や画像データのJPEGは「不可逆圧縮」といって、元のデータとそっくり同じものには解凍できないのですが、それにして⁽³⁾も、おおむね正しく復元されます。人間が耳で聴いたり目で見たりするぶんには、元の音源などと区別が付きません。

デコードによって同じ情報に戻るといことが重要。②、エンコードからデコードという一連の流れに齟齬(注6)そごがないことが、情報伝達の条件です。

大塚 とすると朔太郎の読みは、デコード時に齟齬(注7)そごが発生したような一例かもしれませんが、さらに広い脈絡で考えると、蕪村の最初の意図と、朔太郎の読みは、恋慕という意味、何かを慕わしく思うという心の機微(注8)きびという点では同等です。恋慕の情は、お互いに共有できているようにも思えます。

西欧から「愛」の概念が入ってくる以前の蕪村と、それ以後の朔太郎で、意図と読みがくいちがってしまったが、異性愛に限定せず、人をしのぶ、人の手触りを感じる、人の息づかいや香りを感じるといふ点では情報を共有できています。

川村 俳句は、ことばを使って何かを表現します。俳句やことばは「アナログ」的と思われるかもしれませんが、けっしてアナログではありません。⑤。デジタルな情報です。「あ」と「い」のあいだは連続でなく不連続。「離散的」と呼ばれる情報です。

俳句は何度書き写しても、情報として劣化しません。一万回書き写しても、書き損じがなければ同じ情報です。アナログな情報は、昔のレコードや録音テープがわかりやすい例です。テープに音楽をコピーするたびに劣化します。元の情報をそのまま保存できないのがアナログです。

コンピューターで扱うデジタル情報は、「必ず元に戻る」といことが、情報を正しく伝えること(注9)そごの担保になります。ところが、俳句という情報は、もともとのテキストはデジタルで劣化したり変化したりしなくても、人間が「読む」という部分で、コンピューターで言うところのデコードとはちよつとちがったことが起こっています。

(川村秀憲、大塚凱『AI研究者と俳人 人はなぜ俳句を詠むのか』ZEROによる)

俳句は本当に、門外漢には理解されないのだろうか。

過去に、俳句を知らない人間による俳句のすぐれた読みが、なかつたわけではない。たとえば萩原朔太郎の『郷愁の詩人 与謝蕪村』は、子規派によつて写生的とされた蕪村像を更新した、画期的な俳論だ。^a 蕪村の句の根幹に「郷愁」「母性思慕」を読み取り、その抒情性が強調されている。すぐれた鑑賞として評価されるとともに、そこにはいくつもの誤読も指摘されている。たとえば、

しら梅や誰^{たが}むかしより垣の外 蕪村（『蕪村句集』）

の句について、朔太郎は、

昔、恋多き少年の日に、白梅の咲く垣根の外で、誰^だれかが自分を待っているような感じがした。そして今でもなお、その同じ垣根の外で、昔ながらに自分を待っている恋人があり、誰れかがいるような気がするという意味である。（『郷愁の詩人 与謝蕪村』岩波文庫、一九八八年）

と解している。

しかしこの句は「この梅の木はいったい誰が、いつの頃に植えたものであろうか」（栗山理一^{くりやまりいち}評釈『与謝蕪村集 小林一茶集』筑摩書房、一九六〇年）というように解するのが一般的であり、おそらくは蕪村の意図もこのとおりであつただろう。^b この句に恋の主題を認めめたのは、朔太郎の誤読であるといえる。

③、ここに恋人の存在を感じ取るのは、けつして無理すじではない。専門家の解釈は「誰むかしより」とぼかしたことのムードを評価するが、朔太郎の解釈は一句に物語性を与え、より親しみやすい句になつたともいえる。^d 山下一海^{やましたかずみ}が「創造的誤解」（岩波文庫、巻末解説）という言葉で評したように、朔太郎の解釈のほうが専門的な解釈よりその句を豊かにみせている、ともいえるのだ。これを鑑賞の側からではなく、作品の側からいえば、「創造的誤解」を生むような多義性を持った蕪村の句に力があつたといふべきだろう。（高柳克弘『究極の俳句』中央公論社 による）

（注1）人口に膾炙（する） Ⅱ 多くの人が口にし、広く知られる。（注2）教師データⅡ AIに学習させるために必要なデータ（情報）。

（注3）背景知識Ⅱある状況や問題を理解するために必要な情報。（注4）与謝蕪村Ⅱ江戸時代の俳人。

（注5）萩原朔太郎Ⅱ大正から昭和にかけて活躍した詩人。（注6）齟齬Ⅱ食い違ふこと。（注7）郷愁Ⅱ昔のことを懐かしむ気持ち。

（注8）子規派Ⅱ正岡子規を中心とする俳句の一流派。

問1 空欄 ①、②、③ に入る語として適当なものを、それぞれアからエまでの中から選べ。ただし、同じ記号は二回使わない。

ア だが イ すると ウ 例えば エ つまり

問2 本文中の、^(a)機微、^(b)担保 の意味として適当なものを、それぞれ次のアからエまでのの中から一つ選べ。

(a) ア 内部でひそかに進行する事態や状況。 イ 表面からはわかりにくい趣や事情。

ウ 状況に応じて変化する感覚や感受性。 エ 好意と反感の間で抱く葛藤や苦悩。

(b) ア 負担となるもの イ 保存するもの ウ 保証となるもの エ 促進するもの

問3 本文中に、⁽¹⁾夏目漱石が「I love you」を「月がきれいですね」と和訳したという逸話があります。とあるが、語り手はこの逸話を紹介することでどんなことを説明しようとしているか。最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア ことばの周辺にある意味を理解することは、AIにはもちろん普通の人にとっても決して容易ではないということ。

イ 比喩表現や抽象的な言語表現で表された意味を読み取ることは、人間には可能だがAIには極めて困難だということ。

ウ 月を恋人に見立てるなどの比喩を一つ一つ教えれば、ことばの周辺にある意味をAIに学ばせることが可能だということ。

エ 漱石の逸話のような例を背景知識として知らなければ、比喩表現や抽象的な言語表現を読み取ることはできないということ。

問4 本文中の、⁽²⁾情報のエンコード(符号化)とデコード(復元)という問題に関わってきましたね。という一文は、この対話の中でどんな働きをしているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 相手の意見に同意しながらも、異分野の専門用語を用いた新たな問題を提示し、質の異なる二つの議論を並行して進めようとしている。

イ それまでの話題を総括しながらも、新たな学術用語を用いて話題を転換し、それまでと全く違う内容の議論を新たに始めようとしている。

ウ 斬新な意見を提示しながらも、その時点での互いの意見を改めて確認することによって、議論全体の最終的な結論をまとめようとしている。

エ 前の話題を受け継ぎながらも、異分野の専門用語を用いることで新たな角度からその問題にアプローチし、議論を発展させようとしている。

問5 本文中の、⁽³⁾音源データのMP3や画像データのJPEGの性質を、語り手はどうとらえているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア データを圧縮した側と解凍する側が異なるため、再生する際に情報の変質が起きて、それがかえって創造的な結果をもたらすことがある。

イ 実際は元のデータと異なるものが再生されているが、おおむね正しい上に利便性が高まるので、むしろより有益な伝達形式だと言ってよい。

ウ 元のデータをそのまま完全に再生することはできないため、個々人の解釈によって、受け取る情報の精度が変わってしまう危険性がある。

エ 厳密には元のデータと異なるものが再生されるが、人間の感覚ではその違いが区別できないので、情報を正しく伝える形式と見なしてよい。

問6 本文中の、蕪村の最初の意図と、朔太郎の読み の説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 蕪村は垣根の外の白梅にそれを植えた人の存在を感じ、朔太郎は白梅の植えられた垣根の外に詠み手の恋人がいると解釈しているが、両者とも人の存在と懐かしさを感じているという点で共通している。

イ 蕪村は垣根の外の白梅にそれを植えた誰かの存在を感じたが、朔太郎は垣根の外の白梅を少年時代・青年時代の思い出をたどるきっかけと見ており、両者にとって白梅の持つ意味は大きく異なっている。

ウ 蕪村は垣根の外の白梅に親しかった人々の息づかいを感じ、朔太郎も白梅に詠み手のかつての恋人の姿を見ており、両者ともに故郷への郷愁と懐かしい人々への思いを抱いているという点では同様である。

エ 蕪村は垣根と白梅からかつてそこにいた人々に思いを巡らせたが、朔太郎は白梅を少年期から今に至るまでの詠み手の感情の象徴と考えており、他者への関心という点で両者は相反する解釈をしている。

問7 本文中に、俳句やことばは「アナログ」的と思われるかもしれませんが、⁽⁵⁾ けっしてアナログではありません。とあるが、どういうことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

ア 俳句やことばの意味は曖昧なのでアナログ的だと思われるが、細部に違いはあっても基本情報が誤って伝わることは少ない。

イ 俳句やことばによる表現には古さが伴うのでアナログ的だと思われるが、現代社会でも有益な表現形式となる可能性は高い。

ウ 俳句やことばは解釈に幅があるのでアナログ的だと思われるが、それは解釈上の問題であって、元の情報が変化することはない。

エ 俳句やことばには誤解が生じるのでアナログ的だと思われるが、それは互いの知識が異なるためで、対話する上では支障がない。

問8 本文中に、^A デコード時に齟齬が発生したような一例 とあるが、これを文章【Ⅱ】で述べられている内容に当てはめる場合、「デコード時に齟齬が発生したような一例」に該当しないものはどれか。破線部aからdまでの中から一つ選べ。

a 蕪村の句の根幹に「郷愁」「母性思慕」を読み取り、その抒情性が強調されている。

b この句に恋の主題を認めた

c 「誰むかしより」とぼかしたことのムードを評価する

d 一句に物語性を与え、より親しみやすい句になった

問9 文章【Ⅰ】と【Ⅱ】は、ともに蕪村の「しら梅や」の句に対する萩原朔太郎の解釈は「誤読」だと述べているが、そのように判断する根拠については、【Ⅰ】と【Ⅱ】で少し違いがある。その違いについて述べた次の説明文の□に当てはまる表現として最も適当なものを、ア

からEまでの中から一つ選べ。

《説明文》文章【II】（高柳克弘の『究極の俳句』）では従来の一般的な解釈をもとに朔太郎の解釈を誤読としているが、文章【I】の対談では、これに加えて、ことを根拠として誤読としている。

ア 人の息づかいや香りを感じるといふ点では情報を共有できている
イ 西欧から「愛」の概念が入ってくる以前に詠まれた句である
ウ エンコードからデコードという一連の流れに齟齬がない
エ 俳句は一万回書き写しても、書き損じがなければ情報が劣化しない

3

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

シングルマザーとして二歳の果穂^{かほ}を育てている「わたし」は、電車内で知り合った宮下^{みやした}さんが働く国立自然史博物館を訪れ、クジラの研究者網野^{あみの}先生のトークイベントに参加した。その際、生物画を描く仕事をしている宮下さんに頼まれ、果穂とともに「人間の親子」の絵のモデルを引き受けた。後日、宮下さんに誘われて「わたし」と果穂は砂浜に埋められたクジラの骨の掘り出し作業を見学に来ている。

宮下さんが護岸の斜面に腰を下ろした。リュックからスケッチブックを取り出すと、開いて膝にのせる。頭の骨をスケッチするらしい。わたしは果穂と一緒に隣りに座った。

宮下さんはしばらく骨をじっと見た。初めて見るような真剣な表情。わたしたちを描いてくれたときとは違う。これも生物画の一種だからだろうか。鉛筆を軽く握り、ひと息に美しい曲線を引く。たぶん、上顎の部分だ。一瞬のリズムで描くと言っていた意味が、わかった気がした。

宮下さんが、視線を骨に戻す。一本線を足す。そしてまた、骨を見つめる。

単にその形を目に焼き付けているだけではないと思った。よりリアルに再現したいというだけでもないだろう。

宮下さんはきつと、骨そのものではなく、それを超えて広がる自然^{（注）たいじ}と対峙^{たいじ}している。

一つ一つの曲線に自然が込めた意味を、漏らすことなく写し取ろうとしているのだ。進化によってその形が生まれるまでの悠久の時を、鉛筆の先で刻もうとしているのだ。

わたしは、博物館で初めて宮下さんの絵を目にしたときのことを思い出していた。あのクジラたちを見て、これこそ博物館にふさわしい絵だと感じた理由が、今やっとわかった。⁽¹⁾

作業の人たちのお昼休憩に合わせて、わたしたちも宮下さんと一緒にお弁当を食べた。

掘り出し現場から百メートルほど離れたところに、テーブルとベンチが置かれた東屋(注2)あずまやがあったので、そこに陣取っている。護岸の上で見晴らしがいい。小さなおにぎりを二つと卵焼きを一切れ食べたところで、果穂が「ねんねする。」と言いだした。初めてだらけの半日を過ごし、疲れてしまったのだろう。ベビーカーに乗せて背もたれを倒してやると、すぐに眠ってしまった。

食事を終え、隣りで水筒のお茶を飲んでる宮下さんに、訊ねてみる。

「宮下さんはやっぱり、クジラを何度もご覧になってるんですか。生きて泳いでるところを。」

「何度もはないわよ。小笠原でマッコウクジラを一回、沖縄でザトウクジラを一回、かな。」

「へえ、ザトウクジラも。じゃあ、歌も聴いたんですか。潜ったりして。」

宮下さんは、「まさか。」と笑ってかぶり(a)を振る。

「わたし、カナヅチなのよ。ダイビングなんて、とてとても。あ——」掘り出し現場のほうにあごを突き出した。「何回も歌を聴いてる人が来たわよ。」

見れば、缶コーヒーを手にした網野先生だ。東屋まで来るとまずベビーカーをのぞき、「かわいいモデルさんはお昼寝か。」と言いながら、宮下さんの横に座った。

「何？ 私の話？」先生が訊く。

「ザトウクジラの歌の話ですよ。先生は直じかに何回も聴いてるって。ダイビングをして調査もなさるから。」

「録音されたものはイベントで聴かせていただきましたけど——」わたしが付け加える。「実際はどんなふう聞こえるのかなと思って。」

「聞こえるというかね。」先生はひげを撫なでた。「音に包まれるっていうのかな。間近で潜っていると、全身に響いてくるんですよ。」

それから先生は、自身の経験談をいくつか披露してくれた。どれもわたしの息苦しい日常とはかけ離れた、別世界のような遠い海での話だった。その最後に、わたしは訊いた。

「クジラの歌を何度も聴いているうちに、彼らがどんなことを歌っているのか、感じるようになったりはしないんでしょうか。」

「なれたらいいですねえ。私はまだ修行が足りんようですが。」眉尻を下げた先生が、「そういえば。」とこちらに顔を向ける。

「こないだのトークイベントで、私、クイズを出したでしょ。ザトウクジラの声はどのぐらい先まで届くか、と。あのとき、『宇宙まで！』と答えた男の子がいたの、覚えてます？」

「ああ、いましたね。」

「実はあれ、いいところ突いてるんですよ。NASAが一九七〇年代に打ち上げた惑星探査機に、『ボイジャー』というのがありましてね。ミッションはもうとつくに終えて、太陽系の外に出て行きました。この先はずっと、あてもなく宇宙をさまようわけなんです。」

「はあ。」意識を宇宙に飛ばすのが得意なわたしにも、かなり急な話の展開だった。

「ボイジャーは、『ゴールデン・レコード』ってのを積んでることでも有名でしてね。世界中の言葉や音楽、自然の音なんかを録音されたレコードなんです。その中に、ザトウクジラの歌も入ってるんですよ。」

「へえ、それはわたしも初耳。」宮下さんが目を瞬またたかせる。

「でも、なんでそんなものを探査機に——」わたしは、まさかと思いつつ言った。

「もちろん、ボイジャーがいつか異星人と遭遇したときのためです。レコードを聴いてもらって、地球はこんなところですよ、とね。」
「やっぱり、ほんとにそうなんです。」頭がいいのか無邪気なだけか、研究者という人種はよくわからない。

「ですからね。」先生はにやりとした。「その異星人が我々より高度な文明を持っていたり、我々とはまったく違った知性や思考パターンを持っていたりすれば、クジラの歌も読み解いてくれるかもしれませんよ。」

⁽²⁾「夢のある話、というか、夢みたいなお話ねえ。」宮下さんが言う。

笑って缶コーヒーを飲み干した先生に、わたしは訊いた。

「わたし、あれからよく考えるんです。クジラやイルカの知性とか、頭の中について。先生は本当のところ、どう思ってたっしやるんですか。」

「そうですねえ。」先生は腕組みをした。「こないだお話ししたように、わからない、わかりようがない、というのが研究者としての答えです。です(3)が、ただのクジラ好きのオヤジとしてなら、なるほどなと思う考え方はあります。クジラやイルカを長年追い続けた、ある動物写真家が言ってることなんです。」

先生は、正面に広がる海に視線を向け、続ける。

「この地球で進化してきた悟性(注3)や意識には、二つの高い山がある。ヒト山(注3)とクジラ山(注3)です。ヒト山ってのはもちろん、人間を頂点とする陸の世界の山。クジラ山は、クジラやイルカが形作る、海の世界の山です。どんな山か、その高ささえわかりません。でもたぶん、その頂上には、ヒト山とはまったく違う景色が広がっている。」

「まったく違う、景色——」わたしも海を見つめてつぶやいた。

「人間は、五感を駆使してインプットした情報を発達した脳で統合して、即座にアウトプットする。言葉や文字、道具、技術を使って、外の世界に働

きかける。ヒトが発達させてきたのは、言わば、外向きの知性です。

一方、光に乏しい海で生きるクジラたちは、おもに音で世界を構築し、理解している可能性がある。文字や技術を持たないので、外に向かつて何かを生み出すこともほとんどありません。だったら彼らはその立派な脳を、膨大な数のニューロンを、^(注4)いったい何に使っているのか。もしかしたら彼らは、我々とは違って、もっと内向きの知性や精神世界を発達させているのかもしれない——ということなんです。私なりの言葉で言うと、クジラたちは、我々人間よりもずっと長く、深く、考えごとをしている。」

クジラの、考えごと——。

わたしの意識は、海へと潜っていった。暗く、冷たく、静かな深い海に。

だがもうわたしは、プランクトンではない。この身長一五六センチの体のまま、その十倍はあるザトウクジラと並んで潜っている。

その姿を見てすぐにわかった。これは、さつき骨として掘り出されたあのクジラだ。わたしと一緒に海に還^{かえ}って、また泳ぎ出したのだ。

突然、全身が震えた。低く太い音が体の奥までしみ込んでくる。横でクジラが歌い始めたのだ。わたしもそれを真似てみるが、何を歌っているのかはまるでわからない。

クジラの頭のところまで泳ぎ、その目をのぞき込んでみる。

感情の読めない澄んだ瞳は、わたしのことなど視界に入っていないかのように、微動だにしない。確かに、考えごとに集中しているようにも見えない。

どんなことを考えているか想像しようとするのだが、何も浮かばない。人の頭の中をいつも妄想しているわたしなのに、まるで見当がつかない。

息が苦しくなってきた。クジラから離れ、海面に上がっていく。光が見え、空が見えた。

胸いっぱい空気を吸い込みながら、ああ、と思う。

わたしは、わたしたちは、何も知らない。

クジラは、わたしたちには思いもよらないようなことを、海の中で一人静かに考え続けているのだ。

そして、もしかしたら、すでにその片鱗^{へんりん}を知っているのかもしれない。

生命について。神について。宇宙について。

⁽⁴⁾わたしは、何だかともうれしくなった——。

「さて、私はそろそろ。」

網野先生の声で、^(b)我に返った。

現場に戻る先生を、宮下さんと見送った。作業はあと二、三時間で終わるそうだ。

果穂はまだ眠っていた。風が強くなってきたので、薄手のブランケットを掛けてやる。

「この子、さつき言っていました。」わたしは宮下さんに言った。「いつか、生きてるクジラに会いに行きたいって。一緒に泳ぐそうです。」

「そう。」宮下さんは優しく微笑む。^{ほほえ}「そんなこと、きつと簡単に叶えちゃうわよ。わたしもお付き合いたいわ。水泳教室に通おうかしら。」

「じゃあ、わたしも。」頬が緩んだ。「実はわたしも、泳げないんです。」

手をのばし、風で乱れた果穂の前髪を分けてやる。

⁽⁵⁾この子には、世界をありのままに見つめる人間に育ってほしい。わたしのように、^{むな}虚しい空想に逃げたりせずに。

そうしたらきつと、宮下さんのように、何かを見つめるだろう。そしていつか、必ず何かが実るだろう。

わたしは――。

顔を上げて海に向け、ほやけた水平線のまだ先を望む。何が見えるというわけではない。それでも、⁽⁶⁾還る海をさがすことは、もうないだろう。

いつの間にか、波の音がここまで響いてくるようになっていた。

心地よく繰り返されるその音の向こうに、ザトウクジラの歌声をさがした。

(伊与原新「海へ還る日」新潮社 による)

(注1) 対峙 || 向き合って立つこと。

(注2) 東屋 || 庭園や公園内に休憩、眺望のために設けられる小さな建物。

(注3) 悟性 || 物事を判断・理解する思考力。

(注4) ニューロン || 神経細胞。

問1 本文中の、^(a)かぶりを振る、^(b)我に返った について、ここでの意味として最も適当なものを、それぞれ次のアからエまでの中から一つ選べ。

(a) ア 両肩を上下に振っておどけてみせる イ 頭を左右に振って否定する

ウ 手を左右に振って慌てたそぶりをする エ 帽子を上下に振って合図する

(b) ア 普段の意識に戻った イ 初心を思い出した ウ 息を吹き返した エ 自我に目覚めた

問2 本文中に、これこそ博物館にふさわしい絵だと感じた理由⁽¹⁾ とあるが、宮下さんの絵を博物館にふさわしいと感じた理由とはどんなことか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 対象をじっくりと観察し、細かな部分も見逃さないで正確に写し取ろうとする宮下さんの真剣な態度から、博物館で展示される生物の絵を描く専門家としてのプライドを強く感じられたこと。

イ とても難しいクジラの骨の絵を淡々と描く宮下さんの仕事ぶりを見て、発掘の現場をリアルに再現している博物館の絵に、世界中の注目を集めるほど、学術的な価値があると確信できたこと。

ウ 一瞬のリズムで美しい曲線を引く宮下さんのスケッチには圧倒的な技術の高さが表れていて、博物館に展示されていた絵にも、多くの人の鑑賞にたえうる芸術性がはつきりと見て取れたこと。

エ 単に生物の形を正確に写し取るだけでなく、生物が自然の中でその形態にたどり着くまでの時間さえも、宮下さんはその絵で表現しようとしており、それが博物館の絵にも表れていたこと。

問3 本文中に、夢のある話、⁽²⁾ といふか、夢みたいなお話ねえ。とあるが、宮下さんがこう言ったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア とても実現するはずのない下らない話ではあるものの、想像だけなら楽しいだろうと感じたから。

イ よく知られた有名な話ではあるものの、現実にあるとは信じ難い内容に行き着いてしまったから。

ウ 現実にあつたら面白い話ではあるものの、実現する可能性はそれほどなさそうに思われたから。

エ 子どもの視点では希望にあふれた話ではあるものの、大人の立場では興味を持ってない話だから。

問4 本文中に、⁽³⁾ ただのクジラ好きのオヤジとしてなら とあるが、網野先生がこのようにことわったのはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から一つ選べ。

ア 自分はまだ研究者として勉強が足りておらず、クジラの考えていることを十分に研究し理解できているという自信がないから。

イ クジラやイルカの知性については十分に解明できていないため、研究者としては明言できず、想像力を働かせるしかないから。

ウ クジラの知性に関する科学的なデータは得られているものの、発掘調査の仕事が忙しく、まだ十分に研究を進めていないから。

エ 研究者のキャリアよりクジラ愛好家として過ごした時間の方が長く、その立場からなら自信を持って説明できると感じたから。

問5 本文中に、⁽⁴⁾ わたしは、何だかともうれしくなった とあるが、それはなぜか。その理由として最も適当なものを、次のアからエまでのの中から

一つ選べ。

ア ヒトが発達させてきた外向きの知性では思いもよらないことを、クジラが内向きの知性で考え続けてくれている、と感じられたから。
イ クジラとともに海へ潜る想像をすることで、ヒトとはまったく違うクジラの思考に触れ、その印象を深く心に刻むことができたから。
ウ 海で泳ぐクジラたちの音の世界に包まれることで、謎だった歌の意味を理解することができ、全身が震えるほどの感動を覚えたから。
エ 妄想の世界とはいえ、自分の息が続くかぎり静かな深い海のなかをクジラと自由に泳ぎまわって、この上ない満足感を得られたから。

問6 本文中に、この子には、世界をありのままに見つめる人間に育ってほしい。とあるが、「わたし」は娘の将来にどんなことを期待しているか。その説明として最も適当なものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

- ア 世間からの様々な評価にとらわれず、信念をもって自分の道を進んでいくこと。
- イ 自分の好きなことに打ち込み、綿密な調査を重ねて自然の真理を発見すること。
- ウ 自分の目に映った世界の姿を、作品として正確に写し取る芸術家になること。
- エ 目の前の世界で自分にできることにめぐりあい、それを生かして生きていくこと。

問7 本文中の、⁽⁶⁾還る海をさがすことは、もうないだろう。という表現について、それがどういうことを表しているか、生徒たちが話し合っている。

会話文の **I** に当てはまるものを、次のアからエまでの中から一つ選べ。

生徒1 「わたし」は、空想の世界に入り込むことが多いみたいだね。網野先生の話聞きながら「わたしの意識は、海へと潜っていった。」とあるから、ここは海へ潜る空想をしているんだね。

生徒2 すぐ後で「だがもうわたしは、プランクトンではない。」とも言っているけど、どういうことだろう。

生徒3 この本文より前の部分に、こんな記述があったよ。

プランクトンもいいな、とふと思った。

わたしが海に還るとすれば、の話だ。

深海魚、あるいは貝もいと思っていたが、プランクトンが一番いいかもしれない。

プランクトンに生まれて、海中を漂う。自分の意思や力で泳いだりしなくていい。ただ潮の流れに任せるだけ。喜びもないけれど、苦痛もない。生きていると実感することもないだろうが、それは今も同じだ。

そのうちに、巨大な影が近づいてくる。シロナガスクジラだ。あつという間に飲み込まれる。

束の間の静寂。気づけばまた、プランクトンとして生まれている。そして、クジラの餌になる。永遠にその繰り返し。最高だ。

本文には「わたしの息苦しい日常」とあるし、この文章には「自分の意思や力で泳いだりしないでいい。」「クジラの餌になる。永遠にその繰り返し。最高だ。」ともあるから、プランクトンになって「海に還る」というのは、日常からの現実逃避なんじゃないかな。

生徒2 じゃあ、「だがもうわたしは、プランクトンではない。」っていうのは、「わたし」の心境に何か変化があったってことだね。

生徒1 網野先生からクジラの歌や、人間には想像できないようなクジラの知性や精神の話聞いた後では、空想の「わたし」はプランクトンじゃなく、自分の姿でクジラと泳いでいるよ。

生徒3 クジラが暗く、冷たい海で一人静かに深く考えごとをしていると知って、自分と似たものを感じたのかもしれないね。この場面では、そのままクジラと別れて、人間の姿で海面が上がってきているから、「わたし」は最後には **I** と感じられるようになったんじゃないかな。

生徒2 そうか、だからもう「還る海をさがす」必要はない、っていうことなんだね。

ア 空想に頼ってばかりいなくても、いつか誰かが自分を助けてくれると信じて生きていける

イ 現実には傷ついてばかりいなくても、嫌なことを全て忘れることで心地よく生きていける

ウ 空想に逃げ込んでばかりいなくても、自分なりに現実と向き合いながら生きていける

エ 現実にはこだわってばかりいなくても、自分が本当に望むことを空想しながら生きていける